

〔ジベレリン水溶剤〕

農林水産省登録 第6007号

性 状 : ★ 1

毒 性 : 普通物

危 険 物 : ー

有効年限 : 5 年

包 装 : [1号包装] 1包 (ジベレリン 50 mg × 4包) × 10 × 10

[3号包装] 1包 (ジベレリン 200 mg × 1包) × 10 × 10

# ジベレリン協和粉末

有効成分 : ジベレリン.....3.1%

★ 1 : 白色の顆粒状末で水に投入すると容易に溶け透明な溶液となる。



こちらのバーコードをスマートフォン等で読み取るとi-農力サイトに掲載されている本剤の新しい情報をご覧いただけます。また、詳しい読み取り方・最新情報については11頁をご覧ください。

## 〔適用と使用方法〕

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農業の総使用回数
ぶ  ど う (ヒムロッドを 除く2倍体米 国系品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 75~100 ppm	果房散布 の場合は 30~100 ℓ/10 a	満開予定日 約14日前 (第1回目) 及び 満開約10日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目 : 花房浸漬 第2回目 : 果房浸漬 又は果房散布	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内
ぶ  ど う (ヒムロッド シードレス)	果粒肥大 促進	ジベレリン 100 ppm	ー	着粒後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	果房浸漬	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内
ぶ  ど う (大粒系デラ ウエア) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	ジベレリン 200 ppm	ー	展葉 7~8枚時	1回	花房浸漬 (ホルクロルフェ ニユロン5~ 10 ppm液に加用)	1回
ぶ  ど う (デラウエア) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 75~100 ppm	果房散布 の場合は 30~100 ℓ/10 a	満開予定日 約14日前 (第1回目) 及び 満開約10日後 (第2回目)  満開予定日 18~14日前 (第1回目) 及び 満開約10日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目 : 花房浸漬 第2回目 : 果房浸漬 又は果房散布  第1回目 : 花房浸漬 (ホルクロルフェ ニユロン1~5 ppm液に加用) 第2回目 : 果房浸漬 又は果房散布	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内
ぶ  ど う (キャンベルア ーリーを除く2倍 体米国系品種) [有核栽培]	果粒肥大 促進	ジベレリン 50 ppm	ー	満開 10~15日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	果房浸漬	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内
ぶ  ど う (キャンベル アーリー) [有核栽培]	果房伸長 促進	ジベレリン 3~5 ppm	30~100 ℓ/10 a	満開予定日 約20~30日前 (展葉3~5枚時)	1回	花房散布	2回以内、 但し降雨等に より再処理を 行う場合は 合計3回以内

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぶどう (2倍体欧州系品種) [無核栽培]	無種子化果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	—	満開時～満開3日後 (第1回目)及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	3回以内、但し降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内
		ジベレリン 25 ppm		満開 3～5日後 (落花期)	1回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房浸漬 (ホルクコロフェニユロン10ppm液に加用)	
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm	30～100 ℓ/10 a	展葉 3～5枚時	1回	花房散布	
ぶどう (ヒロハンブルグを除く2倍体欧州系品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 25 ppm	—	満開 10～20日後	1回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	果房浸漬	1回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内
ぶどう (ヒロハンブルグ) [有核栽培]		ジベレリン 50～100 ppm	果房散布の場合は 70～80 ℓ/10 a	満開 10～15日後		果房浸漬又は果房散布	
ぶどう (キングデラ、ハニーシードレス、BKシードレスを除く3倍体品種)	着粒安定果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 25～50 ppm	—	満開時～満開3日後 (第1回目)及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	3回以内、但し降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm	30～100 ℓ/10 a	展葉 3～5枚時	1回	花房散布	
ぶどう (BKシードレス)	着粒安定果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 25～50 ppm	—	満開時～満開3日後 (第1回目)及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	2回以内、但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内
		ジベレリン 100 ppm		満開 3～6日後	1回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房又は果房浸漬	
ぶどう (キングデラ)		第1回目 ジベレリン 50 ppm 第2回目 ジベレリン 50～100 ppm	果房散布の場合は 50～100 ℓ/10 a	満開時～満開3日後 (第1回目)及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布	2回
ぶどう (ハニーシードレス)		ジベレリン 100 ppm	—	満開 3～6日後	1回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房又は果房浸漬	1回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数	
ぶどう (サニール-ジュを除く巨峰系4倍体品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 12.5~25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	-	満開時～ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等により 再処理を行う場合は 合計5回以内	
		ジベレリン 25 ppm		満開3～5日後 (落花期)				1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内
	無種子化	ジベレリン 12.5~25 ppm		満開時～ 満開3日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	花房浸漬 (満開10～15日後 にホルクロルフェ ニユロンによる果 粒肥大促進処理を 行うこと)		
		果房伸長 促進		ジベレリン 3～5 ppm		30～100 ℓ/10 a		展葉3～5 枚時
ぶどう (サニール-ジュ) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 12.5~25 ppm 第2回目ジ ベレリン 25 ppm	-	満開時～ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内	第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等により 再処理を行う場合は 合計5回以内	
		ジベレリン 25 ppm		満開 3～5日後 (落花期)				1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内
	無種子化	ジベレリン 12.5~25 ppm		満開時～ 満開3日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	花房浸漬 (満開10～15日後 にホルクロルフェ ニユロンによる果 粒肥大促進処理を 行うこと)		
		果房伸長 促進		ジベレリン 3～5 ppm		30～100 ℓ/10 a		展葉 3～5枚時
	着粒密度 低減 果粒肥大 促進	第1回目 ジベレリン 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm			満開予定日 14～20日前 (第1回目) 及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 4回以内		第1回目: 花房浸漬 (ホルクロル フェニユロン 3 ppm 液に加用) 第2回目: 果房浸漬
ぶどう (巨峰、ルビー ロマン、ハニ ーナス) [有核栽培]	果粒肥大 促進	ジベレリン 25 ppm	-	満開 10～20日後	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	果房浸漬	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	
ぶどう (高尾、ふく しずく)		ジベレリン 50～100 ppm		満開時～ 満開7日後		花房又は 果房浸漬		
ぶどう (あづましずく)		第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 50 ppm			満開時 (第1回目) 満開4～13日後 (第2回目)	2回以内、 但し降雨等により 再処理を行う場合は 合計4回以内	果房浸漬	2回以内、 但し降雨等により 再処理を行う場合は 合計4回以内

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かんきつ (苗木、ただし、温州みかんを除く)		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	12~3月	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200~700 ℓ/10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60~80 倍液に加用)	
		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
落果防止	50~100 ℓ/10 a		開花始め~ 満開10日後	散布			
不 知 火 は る み	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200~700 ℓ/10 a	収穫後~3月	1回	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60~80 倍液に加用)	3回以内
		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後	散布			
		水腐れ軽減	ジベレリン 0.5~1 ppm	50~500 ℓ/10 a		着色終期 但し、収穫 7日前まで	
ぼんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200~700 ℓ/10 a	収穫後~3月	1回	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60~80 倍液に加用)	1回
		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後	散布			
		水腐れ軽減	ジベレリン 0.5 ppm	50~500 ℓ/10 a		着色始期~ 4分着色期 但し、収穫 21日前まで	
長門ユズキチ (無核)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
		落果防止	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後		散布	
	着果安定		ジベレリン 50 ppm	開花期~ 開花終期		花又は 果実散布	
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10~25 ppm	50~400 ℓ/10 a	収穫予定 14~30 日前		果実散布	
す だ ち	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
		落果防止	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後		散布	
	果皮の緑色維持		ジベレリン 5~25 ppm	50~400 ℓ/10 a		収穫予定 7~30 日前	

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農業の総使用回数
平兵衛酢 かぼす	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	収穫直後～ 収穫約1カ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		50～100 ℓ /10 a	開花始め～ 満開10日後		散布	
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10～25 ppm	50～400 ℓ /10 a	収穫予定 14～30日前		果実散布	
ワシントン ネーブル	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a	収穫後～3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ～80倍液に加用)	
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	収穫直後～ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 500 ppm	30～40 ℓ /10 a	満開 10～20日後 の幼果期		幼果に散布	
日向夏	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a	収穫後～3月	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ～80倍液に加用)		
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	収穫直後～ 収穫約1カ月後	立木全面散布 又は枝別散布		
	無種子化 落果防止	ジベレリン 300～500 ppm	30～40 ℓ /10 a	満開 7～10日後	果実散布		
温州みかん (苗木)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	11～1月	立木全面散布 又は枝別散布		
		ジベレリン 10 ppm			立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000～2000倍 液に加用)		
		ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ～80倍液又は 展着剤に加用)		
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	11～1月 但し、収穫後	立木全面散布 又は枝別散布		
		ジベレリン 10 ppm			立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000～2000倍 液に加用)		
		ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤60 ～80倍液又は 展着剤に加用)		
	落果防止	ジベレリン 10 ppm	50～100 ℓ /10 a	開花始め～ 満開10日後	散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000～2000倍 液に加用)		
		ジベレリン 25～50 ppm			散布		

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
温州みかん	浮皮軽減	ジベレリン 1～5 ppm	100～400 ℓ/10 a	収穫予定日の3カ月前 但し、収穫 45 日前まで	1 回	果実散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000～2000 倍液に加用)	3 回以内
きんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10 a	収穫後～3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60 ～80 倍液に加用)	1 回
	落果防止	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10 a	収穫直後～ 収穫約1カ月後 開花始め～ 満開 10 日後		立木全面散布 又は枝別散布	
	着果安定	ジベレリン 300 ppm	30～60 ℓ/10 a	一番花開花期		散布 花に散布	
びわ (3 倍 体)	着果安定 果実肥大 促進	第 1 回目 ジベレリン 200 ppm 第 2 回目 ジベレリン 200 ppm	—	満開予定日 約 7 日前～ 満開時 (第 1 回目) 及び第 1 回 目処理後 35～60 日 (第 2 回目)	2 回	ホルクロールフェ ニユロン 20 ppm 液に加用 第 1 回目: 花房浸漬 第 2 回目: 果房浸漬	2 回
びわ (麗 月)						25～40 ℓ/10 a	
すもも (貴 陽)	着果安定	ジベレリン 100～200 ppm	20～50 ℓ/10 a	満開 20～ 30 日後 (第 1 回目) 満開 50～ 60 日後 (第 2 回目)		果実散布	
かき	落果防止	ジベレリン 50～200 ppm	30～100 ℓ/10 a	満開 10 日後	1 回	幼果及び へたに散布	1 回
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25 ppm	100～400 ℓ/10 a	開花期	1 花当り 1 回	花に散布	1 花そう当り 3 回以内
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50～200 ppm	—	は種前	1 回	種子浸漬	1 回
みつば (軟化栽培を除く)	生育促進	ジベレリン 10 ppm	50～100 ℓ/10 a	本葉 2～3 枚時 (第 1 回目)と その 2 週間後 (第 2 回目) 但し、収穫 14 日前まで	2 回	葉面散布	3 回以内 (種子への処 理は 1 回以 内、は種後 は 2 回以内)
みつば (軟化栽培)				根株伏込時	1 回	根株上面に 散布	2 回以内 (種子への処 理は 1 回以 内、根株伏込時は 1 回以内)

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農業の総使用回数
トマト	空どう果防止	ジベレリン 10 ppm	1花房当り 5 ml	開花時	1花房当り 1回	花房散布 (トマト落果防止剤と併用)	種子への処理は1回、 1花房当り1回
なす	着果数増加	ジベレリン 10~50 ppm	100~150 ℓ/10 a		1回	葉面散布	2回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は1回以内)
さやいんげん (矮性(促成又は半促成栽培))	節間伸長促進	ジベレリン 5 ppm	1株当り 2 ml	本葉 0.5~1.5枚 展開時	2回以内	茎頂部散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は2回以内)
しそ (花穂)	種の伸長促進 花径の伸長促進		50 ℓ/10 a	出穂期 但し、収穫 5日前まで		茎葉散布	
いちご (促成栽培)	着果数増加 熟期促進	ジベレリン 10 ppm	1株当り 5 ml	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	1株当り 6回以内	茎葉全面散布	1株当り 10回以内
いちご	果柄の伸長促進			頂花の出蕾 直後~ 開花直前	1花房当り 1回	株の中心部に 散布	
いちご (親株床)	ランナー発生促進	ジベレリン 50 ppm	1株当り 10 ml	採苗時 ランナー発生直前~ 発生初期	1株当り 1回	茎葉散布	1株当り 1回
メロン	着果促進	ジベレリン 200 ppm	1花房当り 2~5 ml	開花前日~ 翌日	1花房当り 1回	散布 (4-CPA 剤 50倍液に加用)	種子への処理は1回、 1花房当り1回
うど (春うど)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 50 ppm	1株当り 20~25 ml	伏込時	1回	根株散布	1回
たらのき (促成栽培)	萌芽促進	ジベレリン 50~100 ppm	—			根株浸漬	
		ジベレリン 50 ppm	100~200 ml/m <sup>2</sup>	駒木散布			
ふき	生育促進	ジベレリン 25 ppm	50~300 ℓ/10 a	葉数3~4枚時 (草丈10~ 30cm頃)	1回	全面散布	2回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は1回以内)
セルリー	生育促進 肥大促進	ジベレリン 50~100 ppm	20~200 ℓ/10 a	収穫予定 7~20日前		葉面散布	
畑わさび	花茎の抽出時期促進及び発生量増加	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 100 ppm	1株当り 2 ml	花芽分化後の 10月下旬 (第1回目) 及び第1回目 処理後約10日 後の11月上旬 (第2回目) 但し、収穫 60日前まで	2回	株の中心部に 散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、 は種後は2回以内)

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数	
ばれいしょ	休眠打破による萌芽促進及び小粒いもの増収	ジベレリン 5～10 ppm	—	植付前	1回	30秒間 種いも浸漬	1回	
			250～300 mℓ/種いも 10 kg			種いも散布		
種いも用 ばれいしょ	休眠打破による萌芽促進及び全粒種いもの増収	ジベレリン 5～10 ppm	—	植付前		30秒間 種いも浸漬		1回
			250～300 mℓ/種いも 10 kg			種いも散布		
花き類 (りんどうを除く)	発芽促進	ジベレリン 50～200 ppm	—	は種前		1回	種子浸漬	2回以内 (種子への処理は1回以内、は種後は1回以内)
りんどう		ジベレリン 100 ppm	50～150 ℓ/10 a	定植直前 または定植 1～5週間後			茎葉散布	
			1株当り 5～10 mℓ	収穫後			切株散布	
カ ラ ー	生育促進	ジベレリン 50 ppm	—	植付時			球根浸漬	2回以内
			50～150 ℓ/10 a	花茎伸長期			茎葉散布	
トルコギキョウ		ジベレリン 50～100 ppm	30～40 ℓ/10 a	生育期間中 にロゼット 化した時				1回
ソリダゴ		ジベレリン 25 ppm	1株当り 1 mℓ	活着直後 又は萌芽期				
アイリス		ジベレリン 50～100 ppm	—	植付時	球根浸漬		1回	
シクラメン		ジベレリン 1～5 ppm	1株当り 2～5 mℓ	9月中・下旬	花蕾を含む芽の 中心部に散布			
プリムラ (マラコイデス)	開花促進	ジベレリン 10～20 ppm	—	11月上旬頃の 花蕾出現直後	株の中心部 に散布			
スパティフィラム		ジベレリン 250～500 ppm	30～40 ℓ/10 a	出荷予定期の 2～3カ月前	茎葉散布			
みやこわすれ	開花促進	ジベレリン 50～100 ppm	1株当り 10～15 mℓ	1月中旬の保 温開始時から 7～10日間隔	3回	葉面散布	3回以内	
き く	草丈伸長 促進	ジベレリン 25～100 ppm	50～100 ℓ/10 a	生育期	2回以内	茎葉散布	2回以内	
			—	植付時				
しらん		ジベレリン 50 ppm	—	植付時	30分間株浸漬	1回		
てっぽうゆり (促成栽培)	休眠打破	ジベレリン 1000 ppm	—	低温処理前	30秒間 球根浸漬			
アザレア	開花促進	ジベレリン 250～500 ppm	30～40 ℓ/10 a	開花予定日 約1カ月前	1回	茎葉散布		
さつぎ (施設栽培苗)	茎の伸長 促進 花芽分化 の抑制	ジベレリン 100～200 ppm	50～100 ℓ/10 a	茎の伸長初期 ～伸長終期 (開花盛期以降) 1～2週間間隔	3回	頂芽に十分 散布	3回以内	



作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農業の総使用回数
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 25～50 ppm	50～200 ℓ/10 <sup>a</sup>	休眠期	1回	切り枝 全面散布	1回
			—			切り枝浸漬	
すざぎ (採種樹)	花芽分化促進	ジベレリン 100 ppm	1樹当り 300～ 400 ml	6～8月頃の 花芽分化期	3回以内	葉面散布	3回以内
			—	7月上中旬の 花芽分化期	1回	樹幹基部 剥皮挿入	
ひのき科 (採種樹)	花芽分化促進	ジベレリン 200 ppm	1樹当り 300～ 400 ml	6～8月頃の 花芽分化期	4～5回	葉面散布	5回以内

## ⚠ 使用上の注意事項

### [1] 薬液の調製法及び取扱い上の注意

- 本剤は次表に従って所定量の水に希釈すれば希望濃度の水溶液を作ることが出来る。

小スティック (ジベレリン 50 mg含有) 1包当りの水量

ジベレリン濃度 (ppm)	1 ppm	5 ppm	10 ppm	12.5 ppm	25 ppm	50 ppm	75 ppm	100 ppm	200 ppm	500 ppm	1000 ppm
水量 (ℓ)	50 ℓ	10 ℓ	5 ℓ	4 ℓ	2 ℓ	1 ℓ	0.67 ℓ	0.5 ℓ	0.25 ℓ	0.1 ℓ	0.05 ℓ

大スティック (ジベレリン 200 mg含有) 1包当りの水量

ジベレリン濃度 (ppm)	1 ppm	5 ppm	10 ppm	12.5 ppm	25 ppm	50 ppm	75 ppm	100 ppm	200 ppm	500 ppm	1000 ppm
水量 (ℓ)	200 ℓ	40 ℓ	20 ℓ	16 ℓ	8 ℓ	4 ℓ	2.67 ℓ	2 ℓ	1 ℓ	0.4 ℓ	0.2 ℓ

- 薬液は使用の都度調製し、なるべく調製当日に使用する。また調製液はなるべく日陰に置く。

- ボルドー液等アルカリ性薬剤との混用はさける。

- 本剤の使用に当っては使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

### [2] 使用上の注意

- ぶどう

○ぶどうに関する作物名中の品種による区分は、ジベレリンに対するぶどうの反応性の違いを考慮した区分なので、ぶどうの品種がどの区分 (品種群) に該当するか、病虫害防除所等関係機関に確認してから使用する。

○下記の「ぶどうの品種による区分」に記載のない品種に対して本剤を初めて使用する場合は、病虫害防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

○ぶどうの品種による区分

- ・2倍体米国系品種

「マスカット・ベリーA」「アーリースチューベン (バッファロー)」「旅路 (紅塩谷)」

- ・2倍体欧州系品種

「ロザリオ ビアンコ」「ロザキ」「瀬戸ジャイアンツ」「マリオ」「アリサ」「イタリア」「紫苑」「ルーバルマスカット」「ロザリオ ロッソ」「シャインマスカット」

- ・3倍体品種

「サマーブラック」「美嶺」「ナガノパープル」「キングデラ」「ハニーシードレス」「BKシードレス」

・巨峰系4倍体品種

「巨峰」「ピオーネ」「安芸クイーン」「翠峰」「サニールージュ」「藤稜」「高妻」「白峰」「ゴルビー」「多摩ゆたか」「紫玉」「黒王」「紅義」「シナノスマイル」「ハイベリー」「オーロラブラック」

(「あづましずく」「ふくしずく」等の巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない)

- 降雨や、異常乾燥（フェーン現象等による異常乾燥）の心配の無い日を選んで処理する。
- 処理後の天候急変（降雨、異常乾燥）で本剤の吸収が不十分になるおそれがある場合には、ジベレリンを含む農薬の総使用回数の範囲内で再処理を行うことができる。なお、再処理に当たっては、病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。
- 本剤は樹勢の弱い樹や登熟の悪い枝等に対しては、効果が不十分なので使用をさける。樹勢がやや強めの方が安定した効果が得られるが、極端に樹勢が強い場合はかえって効果が出にくいので樹勢の管理には十分気をつける。栽培管理については、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 本剤の使用により、着粒が安定するとともに果粒の肥大が促進されるので、着粒過多（過密着）による裂果発生のおそれがある。また、果梗が硬化し脱粒しやすくなるので、裂果や脱粒を未然に防ぐため、開花前の整房や着粒後の摘粒等の栽培管理を適切に行う。栽培管理については、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 使用時期や使用濃度を誤ると、花振り、着粒過多（過密着）、有核果混入等のおそれがあるので、使用時期、使用濃度は厳守する。
- 無種子化を目的とした着粒前の処理の際は、特に丁寧に処理することを心がけ、薬液が花蕾全体に十分いきわたるよう注意する。
- 果粒肥大促進を目的とした着粒後の処理の際は、薬液が付きすぎないように、処理後ぶどうの枝やぶどう棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。
- 本剤をぶどう（2倍体米国系品種）に無種子化・果粒肥大促進の目的で使用する場合は、第2回目処理を浸漬で行うときは100ppmで処理する。また、第2回目処理を散布で行うときは75～100ppm（80～100ℓ/10a）で処理する。散布で行う場合、散布処理は浸漬処理に比べ果粒肥大がやや劣ることがあるので、健全な樹に対して行い、薬液が果房に十分かかるように注意する。
- 本剤とストレプトマイシン剤を併用することで無核果率の向上を図ることができる。使用に当たっては、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。また、ストレプトマイシン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- 本剤をぶどう（デラウェア）〔無核栽培〕で使用する場合は、満開予定日約14日前よりも早く処理するときは、花振いすることがあるのでホルクロールフェニユロン剤を加用する。また、ホルクロールフェニユロン剤を加用して処理する際は、ホルクロールフェニユロン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- 本剤をぶどうの果房伸長促進の目的で使用する場合は、必ず花房だけを目がけて花房全体が十分濡れる程度に部分散布する。  
この時期に誤って大量の薬液が枝や葉にかかると、その翌年に発芽不良などの新梢の生育障害が起こるおそれがあるので、動力噴霧機やスピードスプレーヤなどによる全面散布は行わない。
- ぶどう（あづましずく）に使用する場合は、満開4～13日後の1回処理で十分な効果が得られるが、栽培方法や樹勢等によっては満開時と満開4～13日後の2回処理する必要があるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。
- ぶどう（巨峰、ルビーロマン、ハニービーナス）〔有核栽培〕に果粒肥大促進の目的で使用する場合は、早めの処理により無核化率が増加する傾向があるので、有核粒の結実を確認してから処理する。

●かんきつ

〈落果防止〉

○本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用する。

○果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守る。

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

○衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しない。

○低温が続いた年（極端な低温の年）または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がける。

○散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布する。

○ジベレリンの使用濃度を2.5 ppmで使用するときには、マシン油乳剤60～80倍液に加用する。

○マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

●温州みかん

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

○ジベレリンの使用濃度を2.5 ppmで使用するときには、マシン油乳剤60～80倍液または展着剤に加用する。

○マシン油乳剤または展着剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤または展着剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

〈浮皮軽減〉

○本剤処理により、着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整する。

使用濃度の目安

・貯蔵用または樹上完熟の温州みかんでは、概ね3.3～5 ppm

・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね1～3.3 ppm

○本剤処理により葉斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

●ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意する。

○異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がないことがある。

○通常幼果1果当り小型噴霧器で0.1～0.2 ml程度を噴霧する。

●長門ユズキチ（無核）

長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●日向夏

日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●びわ（3倍体）

○本剤処理しないとすべて落果するので必ず処理する。

○樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。

○第1回目の使用時期が早すぎると果梗部のネックが発生しやすく、第2回目の使用時期が遅すぎたり、使用濃度が高い場合は果面の緑斑が残りやすい傾向があるので、使用時期、使用濃度を守る。

●びわ(麗月)

- 麗月では他のびわ品種の花粉により受精し有種子果実となるため、無核果実生産を行う場合は、他の品種の花粉による受精を行わないように、開花前から花房への被袋を行う。
- 樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。

●かき

- 散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなるおそれがあるので、使用時期を誤らない。
- 本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節する。
- 散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行う。
- 品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。  
「富有、早秋、太秋、新秋、甘秋」

●すもも(貴陽)

- 授粉を行ってから、散布する。
- 薬液が付きすぎないように、処理後、枝や棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。
- 第1回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る傾向があるので、所定の使用時期に使用する。
- 本剤の散布により結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節する。

●みつば(軟化栽培を除く)

葉の表裏に十分散布する。高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

●みつば(軟化栽培)

灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減する。

●トマト

落果防止剤を使用した後の本剤の散布は効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、又は混用して使用する。

●いちご

(着果数増加・熟期促進)

- 処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。
  - 本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決める。  
又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。
  - 過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。
- (果柄の伸長促進)

処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。

●セルリー

定植後約1ヶ月以内に散布すると「す」が入りやすくなるので使用をさける。  
なお、スポット散布で使用する場合は1株当たりの使用液量が5~10mlが適量である。

●春うど

芽及び根株が十分したたる程度に散布又は瞬間浸漬する。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行く。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさける。

- ふき  
収穫間近に散布すると効果が減少することがあるので、使用時期を誤らない。
- 畑わさび
  - 花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理する。
  - 全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず2回処理する。気温が5℃以下では効果が劣るので11月上旬からビニール等で被覆し、保温管理する。また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理には十分注意する。
- たらのき
  - 散布は散布むらがないよう噴口の小さい散布器を用いて入念に行う。
  - 葉液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておく。
- ばれいしょ
  - 種いも切断後の処理は葉害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。
  - 浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると葉害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
  - 薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくで発芽遅延等の葉害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
  - 種いもを切断する場合は処理した葉液が十分乾いてから行う。
  - 品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び葉害を確認した上で使用する。
- 種いも用ばれいしょ
  - 本剤は種いも生産用として原採種圃に植え付ける種いもに用いるものである。
  - 種いも切断後の処理は葉害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。
  - 浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると葉害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
  - 薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくで発芽遅延等の葉害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
  - 種いもを切断する場合は処理した葉液が十分乾いてから行う。
  - 薬剤処理した種いも及びその収穫物は食料又は飼料には使用しない。
  - 品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び葉害を確認した上で使用する。
- 花き
  - 処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意する。
  - 処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧する。
  - てっぽうゆり
    - ・球根の低温処理は8～13℃ 7週間とするが、本剤によって発芽が早まる場合があるので、発芽状態を見ながら発芽が始まれば、7週間が経過していなくとも出庫する。
    - ・本剤処理によって休眠が打破され発芽率が向上するが、発根は抑制される。従って定植時期が高温の場合は根の発育が悪くなり、その結果切花重量の減少等の障害を受けやすい。この高温障害防止策として次の処理をすることが望ましい。
      - 球根は100g以上の大球を用いる。
      - 定植時よじらずや寒冷紗の被覆等によって温度を下げるような管理をする。
      - 生育初期に2～3回尿素等の葉面散布剤の散布を行う。

- ・従来の温湯処理によって根ダニの発生を同時に抑えていたところでは、本剤の処理によっては根ダニの抑制効果はないので、殺ダニ剤等の利用によって発生を防止するよう留意する必要がある。
- さつき
  - さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決める。
- りんどう
  - ・処理は葉が十分濡れる程度に散布する。
  - ・使用時期の定植直前は苗姿3～4対葉期を目安にする。
  - ・切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保する。
- ソリダゴ
  - ・高温期の処理では効果を示さないので、低温期（11～3月頃）に処理する。
  - ・処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。
- さくら（切り枝促成栽培）
  - 休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理する。
- すぎ及びひのき科の採種木
  - 散布量は葉が十分ぬれる程度とし、特にその年に伸びた枝にはいていねいに散布する（3～4mの採種木1本当たり300～400ml程度）。
  - 6月頃に処理すると雄花が多くなり、8月に処理すると雌花が多くなる傾向があるので、雄花・雌花の両方をつけるにはすぎでは7月に2～3回、ひのきについては4～5回散布するのが適当である。
  - 同一の木に連年処理すると樹勢が衰える場合があるので十分留意し、樹勢が衰えるようであれば隔年処理を行う。
  - 他剤との混用及び近接散布は効果がおちることがあるので行わない。
  - 樹高が高く葉面散布が困難な場合は、樹幹基部剥皮挿入法で処理する。処理の時期は7月初め頃が適当である。処理は樹幹基部3ヶ所に幅約1～2cmの辺材部に達する傷をつけ、形成層の内側で木部に多少かかるように剥皮し、所定量の本剤粉末を挿入して、剥皮した樹皮でふたをし、ビニールテープ等でしばっておく。なお、使用量は樹の大きさに応じて適宜加減する。
  - 使用に当たっては林業関係技術者の指導を受ける。

[3] 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効薬害の有無を十分確認してから使用する。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。



## 安全使用上の注意



- 本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。  
眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。  
使用後は洗眼する。
- 使用の際は農薬用マスクなどを着用する。作業後はうがいをする。
- 浸漬処理に使用する際は不浸透性手袋などを着用する。
- 直射日光をさけ、なるべく低温で乾燥した場所に密封して保管する。